

おにおん倶楽部

林芙美子

青空文庫

大木繁、滑川浩太郎、片貝巖、奥平善一、これだけが、おにおん倶楽部のメンバアである。

おにおん倶楽部の名付親は、巖ちゃんの兄さんの庄作さんで、英語でおにおんとは、玉葱の意味だそうです。この四人はとも仲良しだけれども、四人とも気が弱くて、何にでも感激する。そしてすぐ泣くと云うので、庄作さんが、おにおん倶楽部とあだなをつけたのだそうだ。繁ちゃんやんは六年生、浩ちゃんやんは都立×中の一年生、巖ちゃんやんは××商業の一年生である。

空襲前のころは、四人とも翹町×町の同じ町内にいたのだけれども、空襲で自分の町が焼けてしまうと、この四人はてんでんば

らばらになつて、終戦後、お互いの住所が判つて、また四人はいつしよに會うようになった。

繁ちゃんは三鷹の叔父さんの家にいた。

浩ちゃんは鎌倉雪の下のお姉さんのお嫁入りさきにいた。

巖ちゃんは中野の小瀧町に借家をして住んでいた。

この三人は家じゆう、誰もみな元氣でいたけれども、善ちゃんだけは、お父さんがビルマで戦死して、お母さんは甲府の疎開さきで病氣で亡くなつて、お姉さんと二人で東京へ戻つて來た。いまは池上の叔父さんの家にいる。

月のうち、一度は小瀧町の巖ちゃんのうちにあつまる事になつていた。四人があつまると、狭い家の中が、まるでお祭りみたい

に賑かになって、ラジオを十臺も鳴らしているようだと言作さんが冷かしている。

おにおん倶楽部員は、月に一度は集めるのだから、一ヶ月のうちに、何かいい事をして、その話を持ち寄ろうではないかと約束がきまった。

何かいい事をすると言つても、わざと、いいことをつくる工風をするのは面白くないから、自然な氣持でいい事をすると言うのが、善ちやんの意見である。だから、一つもいいことをしなくても仕方がない、嘘の氣持ちでそんなことをするのはごめんだと云うのも善ちやんだつたので、皆、善ちやんの意見には賛成した。

ところが、巖ちゃんはなかなかの冒険好きで、いつも、夢みた

いな空想ばかりしているの、おにおん倶楽部員は、巖ちゃんの事を、煙りの巖ちゃんと云うあだなをつけていた。

九月總會がまじかに迫っているの、煙りの巖ちゃんは、何かいいことをするチャンスはないかと考えていた。

今日は日曜日。

巖ちゃんは勉強をすませて、お母さまにつくってもらったパンを二つ、ポケットにいれて戸外へ出た。

何かいいことはないかな。倶楽部員があつと云うような、いいことをしたいものだと思っていたので、見るもの聞くもの珍らしく、とうとう歩いて新宿驛に行ってみた。

新宿驛は、まるでもう人の河のようである。流れてゆく人の波

を見てみると、巖ちゃんは冒険好きな氣持がますますつのつて來た。

すると、驛の前で、たくさんの人の流れがうようよしているなかで、色眼鏡をかけた、盲目のひとが二人、しつかり手をつなぎあつて、人の波にぶつつかりながらうろろしているのを見た。二人とも大きいリュク・サツクを背負つて竹のステッキを持つている。

じいつと巖ちゃんが見てみると、その二人はいかにも途方にくれたようなかつこうでしまいには、驛のホールの眞中につつ立つてしまった。そして、しばらく、二人はひそひそ話あつている。これを見て、巖ちゃんはそばへゆき、

「何處へ行くのですか？」

と、きいてみた。子供の聲なので、盲目のひとは、ちよつとびつくりしたように、顔を左右にむけていたが、

「上野まで行くんですが、切符はどこで買ったらいいのか判らなくなつたンでね。」

と云つた。

「じゃア、僕、買って來てあげよう。」

巖ちゃんがそう云うと、盲目のひとは不安そうに首をかしげていて、お金を出そうとする様子もない。巖ちゃんはうたぐつてい
るのだなと思つたので、

「そこへいて下さい。僕、お金あるから買って來る。」

そう云つて、巖ちゃんは、三枚の切符を買つて來た。

「さア、これ切符、僕、上野まで送つて行つて上げましょう。」

と、巖ちゃん、盲目の二人に切符を握らせると、二人はあわてたように顔を赫くして、ポケットをさぐつて札入れを出している。

「いいんですよ。財布なんか出して、スリに盗まれるといけなから、行きましょう。」

そう云つて、巖ちゃんは一人の手を取つて改札に行つた。やがて中央線の發着するホームへ出ると、盲目の二人は、恐縮して、何度もお禮を云うのである。

「上野から、君たち、何處へ行くの？」

「長野まで行って、それから、湯田中と云う温泉場へ行くんでね。」

「ふうん、遠いんで大變ですね。」

「坊ちゃんは、何處です？」

「僕は、前には、麴町にいたんだけど、焼けちやったんだよ。でも、半年ばかり、お母さん達と、草津の方に疎開してたの……。」

「ほう……草津にねえ、どうですか？ あすこは、宿屋は繁昌していますか？」

「さア、僕は知りあいのところにいたからよく知らない。宿屋も満員だけど、疎開學童がいっぱい行ってたから、よく判らない。」

やがて、電車が來た。

三人はやつとの思いで乗り込んだ。

「おかげさまで助かります。濟みません。」

二人は、いかにも安心したらしく、ほつとしている様子である。

「上野へ着いて、二時何分の新潟行きの行列のところまで、送つて行つてあげよう。」

と巖ちゃんは云つた。

一人の背の高い方の、盲目のひとが、「自分は何年にも、こんな親切なひとにあつたことがないです。」とよろこんでいる。

「兵隊に行つてたんですか？」

巖ちゃんがきいた。

「自分は、満洲に長く征つていて、それから中支に征き、眼をな

くしたんです。」

と、そのひとは云った。

ああそうか、兵隊だったのかと、巖ちゃんは氣の毒に思つて、今日は、いい事をしたと思うのだった。——上野へ着くと、ここもものすごい人の波で、やつとの思いで、新潟行の行列を探すと、その行列はもうだいぶ並んでいた。それでも、あと二時間以上もあるのです、大丈夫乗れそうだけれど、改札してからが問題だと思つて、巖ちゃんは、何かいい工夫はないかと考えていた。

「改札しても、人がどつと走りつくらして乗るから、大變だね。」

僕、そつと、あつちの方の改札からくぐつて、君達乗せてあげるよ。」

と云うと、盲目の人達は、

「いや、それじゃア、大變だから、それはもうやめて下さい。驛員にみつかつて、坊ちやんが叱られると大變だから……。」

と、濟まなそうにしている。

行列の中に、やっと、リュックをおろして、二人の盲目の人はほつとしている。

二人の話によると、東京では、家もないし、揉みりようじを頼む人もあまりないので、これから、長野の温泉場をまわつてみると云うことだった。温泉にも組合があつて、なかなかふりでははいれないけれども、何とか住みこんで働いてみるつもりだと云っていた。何處へ行つても、このごろはものが高いいので食べてゆく

のが大變だし、にわかめくらなので、不自由で仕方がないと話していた。背の低い方のひとも、十二三位から眼が悪くなつて、見えなくなつたのでとても困るところぼしていた。

「煙草が吸いたくても、もう四日も吸わないし、第一、コロナだの、ピースなんて高く買って買えやしないからね。頭がふらふらですよ。」

兵隊だつたと云う、盲目のひとが淋しそうに笑つて云つた。――まだ相當時間があるので、巖ちゃんは、二人をそこへおいといて、うまくホームへはいってゆく研究を試してみた。ホームは、いまのところではがらんとしている。右手の隅の方に驛員の出はいりしている改札口があつた。

よおし、あすこから、そつとはいって、二人を汽車に乗せてやろう、巖ちゃんはその考えて、しばらく、そこをうろうろしていた。だんだん、胸の動悸が激しくなってくる。煙みたいに、すつと入れるという、科學は發明出來ないものかと思ったりした。

その改札口が金城鐵壁のようにおそろしく見えてくる。一寸法師になれないかな……。巖ちゃんはいろいろと考えていた。すると、一人のアメリカ兵がさつさと來て、その改札を乗り越えてホームの方へ行ってしまった。英語でもべらべらと出來たら、盲目のひとのことを頼めるのだがなど、巖ちゃんは残念で仕方がない。いまから、急に、英語をしらべるわけにもゆかない。

すると、一人、優さしそうな女の驛員が、その改札のところへ

来た。巖ちゃんはびっくりして、改札口から離れた。ちよつと、あの女驛員にたのんでみようと思いついた。

巖ちゃんは、学校でならった、民主主義と云うことをふつと思出したので、顔をまっかにして、

「あのう……。」

と、もともとしながら、その女驛員に近よって行つた。そして、新宿驛からのことを話そうとしたのだけれど、女驛員はみなまで聞かないで、黙ってさっさと行つてしまった。巖ちゃんは涙ぐんでしまった。

どうしたらいいのか、てがつけられない感じだった。どうも、僕は話がくどくて、下手くそだな……巖ちゃんはそう思った。仕

方がないから改札を飛び抜ける工風をこらすより仕方がない。

人垣を押しわけて、盲目のひとのところへ戻って行くと、二人は、真黒い代用パンを半分こにして食べている。一つしかパンを持つていないらしいので、巖ちゃんは二つのパンを出して、盲目のひとに一つずつ上げた。

「いえ、何とかなるから、それだけはいけませんよ。坊ちゃんも腹が空いてるんでしよう。やめて下さい。ほんとにいけません……。」

行列はだんだん長くなっている。無理矢理、巖ちゃんはパンを二人に握らせた。

「僕のは、アメリカの粉でつくったパンだからうまいよ。僕はか

えれば食べられるんだから……。」

盲目の二人は掌にパンをのせ、とてもよろこんで、ていねいにおじぎをしている。そばにひしめきあっている人達も、二人の盲目のひとたちには同情をしている様子だったけれど、巖ちゃんは、改札がはじまれば、このひとたちの同情も、すぐ消えてなくなつてゆくことを、よく知っているのだった。

やがて時間が来て、改札になった。盲目の二人はいそいでリュックをかついでいる。

巖ちゃんの冒険が始まる。

改札が始ると、巖ちゃんは見ておいたところからするりと滑りこんだ。神様が助けて下さったのだと思った。どつとなだれこむ

改札のところ、やっと、もまれてよろよろしている二人をみつけて、巖ちゃんは、二人を引っぱるようになして、汽車のところへ連れて行き、窓から二人の尻を押しあげてやった。

「さア、もういゝね、じゃア、さようならア、大事にねッ。」

巖ちゃんが二人に、握手をすると、兵隊だった方の盲目のひとが、巖ちゃんに「これでも持つて行つて下さいッ。」と呼んで、點字新聞をくれた。巖ちゃんはよろこんで貰った。

ホームにはまだたくさんの方がなだれて來ている。巖ちゃんは腹がぺこぺこに空いていた。

陽の明るい、驛の前へ出て、點字新聞をひろげてみると、五十錢札が四枚はいつていた。巖ちゃんはよれよれのきたない五十錢

札をポケットへ入れた。

とにかく、腹ぺこなので、大いそぎで家へ戻った。

おにおん俱樂部の總會の日。

はしやぎやの巖ちゃんは、盲目のひとを上野驛へ送って行つた話は、なぜかしなかつた。何だか、巖ちゃんは、それを、如何にもいい事をしたかのように話すのはいやだと思つた。

「巖ちゃんは、何かあつたのかい？」

善ちやんがたずねた。

「何もないよツ。そんなにいい事つて、別にない……。」

そう云つて、煙の巖ちゃんは、眼をつぶつて點字新聞を指でおさえてみている。點字新聞は汚れてぼろぼろだった。みんな不思議

議そうに、その點字新聞をのぞきこんだ。

青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

おにおん倶楽部

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>